

砂遊びは何歳になっても楽しい

1. はじめに

子どもの砂遊び。それは、多くの園でごく普通に、そして当たり前のように見られる遊びでしょう。子どもは砂が大好きです。ひとたび砂で遊び始めたならば、なかなか自分から遊びを止めることはありません。子どもにとって砂遊びがどれほど魅力的であるかは多くの保育者が認めるところでしょう。ところが、園生活が長くなった子どもたちのなかには、何となく砂遊びから遠ざかっていくことも少なからず見られるようです。

ある幼稚園の先生は次のように話します。

「年少の頃には砂遊びに集中していたけれど、年中、年長となるに従って、だんだん同じ遊びに飽きてしまうのか、あまり昔のように遊ばなくなっています。私たちも、子どもたちの砂遊びにどのように関わっていけばいいのか、よくわかりません」

はたして、砂遊びは一定の年齢を超えた子どもたちにはもはや魅力のない遊びとなってしまうのでしょうか。砂遊びというのは、それほど変化のない単純な遊びなのでしょう。

この疑問に対して、私は、砂遊びほど年齢に関係のない遊びはないと思っています。また決して単純な遊びでもありません。これは子どもたちの砂遊びの様子をずっと見てきた私の実感です。

本特集の第二部は「どのようにして遊びを変えていけるか」ということがテーマですが、砂遊びは、あまりにも当たり前の遊びと見なされてしまったことから、変化の可能性などこれまでほとんど意識されることはなかったようです。そのことが結果として砂遊び本来の魅力を失わせ、遊びの低調さにつながっているように思えてなりません。砂遊びの何をどのように変えていくことができるのか。そしてこの遊びが、どんな年齢の子どもたちにとっても再び当たり前の遊びとして広がりを見せていくよう、本稿ではその具体的な提案をしていきたいと思えます。

2. 砂はどうなっていますか

まず、いま、園の砂場の砂はどのような状態になっているでしょう。素手では掘りにくいほど表面が固くなっているところはないでしょうか。穴を掘ったらすぐに底が見えてしまうぐらい、砂の量が減ってはいないでしょうか。枯れ葉や小枝などが砂の上に散乱したままになってはいないでしょうか。もし、これらの一つでも当てはまるようなことがあれば、砂遊びが盛り上がりえないのは当然です。

子どもたちにとって砂場がたっぷりの柔らかい砂で満たされていることは、絶対的な魅力です。砂場というのは、砂を大量に満たすことによって他の地面とは一線を画した別な空間となります。子どもはそこに足を踏み入れたときから、他とは違う感触で自分の体が受けとめられることに気づきます。柔らかい砂に足を取られないように踏みしめ、バランスを取ったりしながら自分自身の身体を感じ、地面に立つという行為への意識を強くはたらかせます。ふかふかの砂の触り心地のよさは、すぐにも子どもを遊びに引き込みます。砂が固まっているときはぜひとも掘り起こして下さい。

砂の量が減り、新たに砂を購入するときは、ぜひ砂の業者さんにふるいを通してもらうことを勧めます。ふるいの目は、四ミリ程度が適当です。若干手間はかかりますが、砂の粒子が均一化し、触り心地と扱いやすさは大きく変わります。また、日常の保育のなかでもこの「ふるう」という行為を取り入れることで、砂のコンディションは維持されるでしょう。

そもそも砂の粒子の大きさなど、普段大人はあまり意識することはないかも知れません。しかし子どもたちはそれが遊びの成否を決める重要な要素となることを経験的によく知っています。たとえば、お

だんごづくり。子どもたちは、どんな砂がだんごづくりにふさわしいか、砂をよく見ながら選んでいます。写真1は、最後にだんごに振りかけるいわゆる「さら砂」を自分でつくっている女児の様子です。彼女は長方形の板の上に砂をのせ、それを両手で前後・上下に振っているのです。その動きで粒子の大きな砂が転げ落ち、板の上にはより細かな砂だけが残るといいます。なんと彼女は遠心力を応用し、とても微妙な力のいれ具合をもって、砂の粒子にこだわっているのです。(写真1、「さら砂」づくり)

一口に砂といっても、いろいろな砂があります。地域によっても種類が異なり、また同じ地域でも川砂、山砂、海砂とそれぞれの違いを見ることができます。種類の違いは、色、粒子の大きさや形、組成、保水性や粘性等の違いとなり、それらの違いによって遊びは変わっていきます。最近では外国産の真っ白い砂が輸入され、それを砂場の砂として導入する園もあります。子どもたちはその色を見ただけで歓声を上げて砂場に飛び込みます。また軽石のようなものを人工的に砕いてつくられた砂もあり、これもまた不思議な感触をもち、細かな創作に適しています。

園の砂場の砂がどこから来ているものなのか、また園のある地域にはどのような砂があるのか、こんなこともぜひ一度、調べてみてはいかがでしょうか。そのことを通して、地域の自然や保育に必要なものの流通経路といった広い視野が開かれ、足下の保育環境をみる目も自ずと変わっていくでしょう。

3. 砂(場)のレイアウト

砂のもつ魅力の一つとして、その形を自由自在に変えられるということがあります。でも、その魅力は園の砂場において十分に引き出されているでしょうか。

もう一度、園の砂場を見てみましょう。もしかすると砂場の砂はいつも、ただ平たく敷き詰められているだけということはないでしょうか。もしそうならば、ときには子どもの背丈を超えるぐらいの大きな山をつくってみませんか。その山も一つではなく、二つ三つと連ねてみたり、大中小と階段状につくってみたり、ぜひいろいろなレイアウトを試してみてください。

このような大きな山づくりは、もちろん子どもたちと行うのもいいのですが、子どもたちの登園前に保育者たちだけでこっそりと砂場につくっておくのも楽しいでしょう。普段と違った砂場の様子に子どもたちはいち早く気づいて砂場にやってくる。高い山があると、わずか一歳半ばの子どもでさえ、もう初登山に挑戦します。一步一步というか、一步一步を慎重に運びながら、最後には両手を山の斜面から離して、両足を踏ん張り立ち上がると満面に笑顔があふれます。少し年長になると、だれよりも早く山の上に走り登ろうとします。連山の縦走を始める子もいます。砂山を登ったり下ったり、行ったり来たり。また、わざとのようにふらついては、どんと砂山に全身を任せて倒れ、そのまま転げ回るなど興味深い行動が見られます。(写真2、1歳4ヶ月女児の砂山登り)

砂場における砂のレイアウトとともに、園内における砂場のレイアウト、つまり、砂場の複数設置・配置ということも考えられます。これは年長児とは別の年少さん向けの小さな砂場といった形で実施されているところも多いと思いますが、このような年齢分けの他に、遊びの内容別に砂場を変えてみるといった発想はどうでしょうか。

イギリスの幼児施設では屋内のサンドボックスというものをよく見ることができます。足つきの大きな箱に砂が入れられているのですが、ある園では表1のように乾燥した砂と湿った砂の二つのサンドボックスを用意し、そこに準備する小物も日によって変えられていました(笠間、一九九一)。(表1、砂遊びの週間計画表)

日本では、屋内砂場というのはなかなか馴染みにくい遊具の一つですが、この発想は別に屋内でなくても実践できます。メインとなる砂場の他にサブの砂場をつくって、保育者それぞれのアイディアによ

る遊びを展開してみてもいいでしょうか。先ほど、砂には多様な種類があることを述べましたが、この砂場に違った砂を入れておくことも一つの案です。普段とは違った色の砂や、ふるいにはじかれた粒の大きめな砂だけをここに入れておくのもおもしろいでしょう。

サブの砂場としては、太い角材でつくった枠を地面に直接置き、その中に砂を盛り入れるといった簡易のもので十分です。また私はよく「トロ箱」と呼ばれるコンクリートなどを混ぜ合わせるときに使う大きめの箱をホームセンターで購入し移動型砂箱をつくりませんが、これも使い勝手は良好です。

園のいろいろな場所にいろいろな状態の砂場がある。そしてそれぞれに特徴をもった遊びの仕掛けがしつらえてある。そんな環境を整えていくことはきっと保育者自身のわくわく感を高め、子どもの動きを期待をもって見つめることにつながるでしょう。

4. 砂場の周辺環境（テーブルの設置とそのレイアウト）

次は、砂場の周囲に少し視野を広げてみます。砂場は一つの独立した遊具ですが、子どもの砂遊びは決してそこにとどまるものではありません。そこで、砂場との連動性を意識した環境設定として、テーブルのような台の役割に注目したいと思います。

一歳中頃から三歳頃までの砂遊びでは、いろいろな容器に砂を入れ、それらを持ち運んでは置いたり、ひっくりかえしたりという行動がとて多く見られます。その時に必要な環境が固い平面です。砂場の縁がこれにあてられることもあります。必ずしも十分な広さではありません。その時テーブルのような平面が大切な役割を果たします。年中から年長にかけては、自分たちが砂でつくったものを何かに見立てては物のやりとりや会話などのコミュニケーションを展開させますが、その時も座になって囲めるテーブルはとても有効です。

ただこのテーブル類も、いつも同じものを同じところに、というのでは遊びの固定化につながります。テーブルにも板面の広いものや狭いもの、細長いもの、足の高いものや低いものなどいろいろあります。いくつかのものを時々入れ替えたり、組み合わせを考えることも必要です。また配置場所も、砂場のすぐ横に置いたり、少し離してみたりと位置を変えることにより、テーブルの回りに集まる子どもの年齢や人数、組み合わせは変化し、遊びの内容や展開も変わっていきます。

5. 砂遊びのための道具類

もし砂場に砂遊びのための道具が何一つなかったら、子どもたちの砂遊びはどうなるでしょう。私はこのことを、一歳台半ばの子どもたち五名を対象に試してみました。結果だけを述べれば、子どもたちは単なる砂の平面にはあまり関心を示さず、ただきょとんと立ちすくむか、砂場から立ち去っていくという反応を示し、積極的な遊びは成立しませんでした（笠間、二〇〇七）。

子どもの発達上、子どもが手に持つことのできる物がいかに大切か。佐々木（二〇〇八）は、「人間の子どもの最初は移動できるようになったときには遊離物を手に持っている…（中略）付着物しかない部屋では子どもは育てられません。仮にそういった状況があったとすれば、おそらく運動の発達が難しくなるのではないのでしょうか。」と述べています。

「遊離物」というのは自分で移動できる物であり、「付着物」というのは子どもの力だけでは移動できないような物のことですが、砂場周辺ではまさにこの遊離物と子どもの関わりがいたるところで見られます。

一歳前後から二歳半ば頃までの子どもたちは、ほとんどが両手もしくは片手に何らかの道具を持っています。子どもたちは物のつかみ方、持ち方、それを使った砂の掘り方、すくい方を、手指や手首、腕

の力のいれ具合や抜き具合、姿勢の保ち方をいろいろ変えながら、徐々にその操作能力を高めていきます。いわば道具を扱うための行為が砂遊びだといっても過言ではないほどです。

そう考えてみるならば、それぞれの園における道具の環境がどのようになっているか、これもまた大事なチェックポイントです。道具の種類や形、大きさなどは、バラエティ豊かなものになっているでしょうか。またその数は子どもの人数に見合った十分なものとなっているでしょうか。道具類は子どもたちが自由に使い、また片付けができるよう、きちんと整理されているでしょうか。

砂遊びの道具類は、砂に直接作用を及ぼすものとそうではないものの大きく二つに分けることができます。さらに、最初の砂に作用を及ぼす道具というのは、スコップのような砂を掘ったりすくったりする機能を主とする物と、砂をためるといった機能を果たす容器類とに分けることができますが、それぞれについて可能な限りいろいろな形や大きさ、素材や重さの違ったものを用意したいものです。市販の砂遊びの道具類にも丈夫でいいものがあります。また、使い古した台所用品や家庭用品なども子どもたちにとってとても魅力的であり、多様な物をそろえることを勧めます。

一方、砂に直接作用を及ぼさないものというのは、たとえばボールや板材、雨どい、フープ、ナイロンの袋、段ボール紙、電車や車の模型などがあげられます。一見、砂遊びとは無縁なように思われますが、これらは子どもや保育者の発想によってどんどん砂遊びを変えていくことのできる貴重な素材となります。砂山にいろいろなルートをつくってはボールを転がす、ダムや水路をつくって水を流す、峡谷に橋をつくって車や電車を走らす、フープを組み合わせて宇宙基地をつくるなど、特に年中以降の子どもの想像や創造を広げていく素材となって遊びはダイナミックに変化していきます。

6. サンドアートへの挑戦

ここでもう一つ、私自身が子どもたちや親子、保育者を対象に行っている砂遊びのワークショップから、少し発展的な遊びを紹介します。

①新しい道具の導入

まず、新たな砂遊びのための新しい機能をもつ道具を紹介します。それは、砂を集めて固めたり、面を整えたり、あるいは砂の固まりを「切る」ことのできる道具で、左官屋さんが使う「こて」と呼ばれるものです。これはぜひともプロ使用の本物を用意することをお勧めします。

こてには、木製の「木ごて」と金属製の「金ごて」の二種類があります。木ごての大きさは子どもの手のひらの三〜四倍ほどあります。先端部分はちょうどスコップのように砂をすくうこともできますが、この道具の魅力は横にしてたくさんの砂を一気に押し集めることができることです。また、砂の表面を押しつけるように滑らせていくと、とてもきれいな平面をつくることができます。その応用として盛り上げた砂山を四面に滑り落とすようにして押しなでていけば、あっという間にピラミッドの形ができあがります。

さて、もう一つの金ごてですが、これはこて面が薄い金属でできているために、その扱いにはちょっと注意を要しますが、年長ともなれば十分使いこなすことのできる道具です。木ごてよりも鋭く、スパッと砂の固まりを切ることができます。たとえば、砂山の上部に平面をつくり、その四辺を金ごてで垂直に切り落としていくと、砂の立方体ができあがります。ちょっとずつ角度を変えれば五角柱、八角柱・・・という形も思いのままです。さらには、砂を垂直に切り、次に平面をつくり、また垂直にということを繰り返していくと、何と砂山には階段が現れるのです。(写真3、砂のピラミッドと階段)

新しい道具の使用により、とても砂とは思えない美しい平面や立体物が次々に現れます。しかもそれを自分の手で作り出すことができるというのですから、子どもたちは大いに喜びます。

②もう一つの新しい遊びの提案

さて、さらにもう一つ、子どもたちに人気のある遊びを紹介します。

今度は少し大きめのポリバケツ（私は45～70リットルのゴミ用に用いられるポリ容器を使っています）を用意し、その底を厚めのカッター等で切り抜きます。それを砂の上に垂直にひっくり返して置き、中に砂を入れます。砂が容器の半分ほど入ったあたりで、砂が隠れる程度の水を入れ、スコップ等で突き刺すようにしながら、砂と水を混ぜ合わせます。すると水がすーっと引いていくので、再び砂を容器の上近くまで入れた後、水を入れて同じことをくり返します。砂が容器の上までたっぷり入ったところで今度はしっかり押し固めます。子どもをその上に乗せて静かに足踏みをさせるのも楽しいでしょう。また、このとき、容器の周囲全体をスコップ等でいねいにたたいておきます。こうすることで、中の砂がしっかり下に沈み、また容器と砂が分離しやすくなります。このような作業の後、少し時間をおいたところで、いよいよ全員で容器を砂からはずす作業に入ります。

容器の下の部分にしっかりと指を入れ、みんなで少しずつぐいぐいと持ち上げていくことで、容器の下には大きなプリンのような砂の固まりが現れます。同時に大歓声が上がります。

これを成功させるまでには何度かの試行錯誤を要しますが、小さめの容器から始めていけば、そのコツをすぐにつかむことができるでしょう。

また、このようにしてできあがった砂の固まりは意外にもしっかりと固まっています。ここで先ほどの金ごての他にペンナイフ、スプーンなどいろいろなものを使って窓や入り口をつくったり、螺旋階段、さらに砂を盛り上げて壁や回廊をつくっていけば、本格的なお城のできあがりです。（写真4、大きな砂型づくりと彫刻）

この遊びは、子どもたちはもちろんのこと、大人も子どもと一緒に楽しむことができます。親子保育などの活動としてぜひお勧めします。

7. まとめ

以上、砂遊びを変えていくための具体的な提案を行ってきました。最後に、これらの提案が意味することを保育における課題という視点から考えておきたいと思います。

①環境設定の重要性

子どもの遊びを決定する大きな要因として、野村（一九九九）は、「様々な環境と出会うことによって、行動が引き起こされ遊びが生まれます。出会うことがなければ何も起こりません」と述べています。これは砂遊びも全く同じです。子どもと砂との出会いの場面をどのように創出するか。そのための環境をどのように設定するか。この、遊びを規定する重要な要素が、意外にもおざなりにされている。そのような問題意識から、本稿ではまず遊びの対象となる素材としての砂そのものの質や状態、砂場及びその周辺環境、さらに遊びに用いる道具類といった物的・空間的な環境についての提案を行いました。砂や砂場というものは、何となく園庭の一部として自然にあるものでは決してありません。あくまで子どもの遊びを目的とした環境の一つであるという認識と意識においてその改善に取り組むことが必要でしょう。また、ひとたびそれが実行されるならば、子どもの遊びも劇的に変化することが期待できるのです。

②保育者の遊びのとらえ方、子どもとの関わり方

物的・空間的な環境とともに、保育者との出会いもたいへん重要な要素です。特にその保育者が、子どもの遊びや子どもとの関わりをどのように考えているかは大きな問題です。井桁（二〇〇五）は、ともすれば見逃しがちな子どもたちの活動も「ていねいなまなざしを通してみる」ことで、どんな行為の

中にも子どもの「宝物」を発見することができるかと述べています。私は、砂遊びが低調なものになる原因として、保育者がこの「宝物」を子どものなかに発見できていないことがあると考えます。子どもたちが砂遊びなのかで見せる様々な動きや、物や人との関わり、ひらめきや工夫、喜びや願い、期待や達成感等々、子どもの姿や思いに保育者が寄り添い応えることができなければ、遊びが停滞していくのは当然でしょう。これはどんな遊びに対しても言えることです。

では、どうすればこの「ていねいなまなざし」をもつことができるのでしょうか。第一に、すでに述べたように、遊びの環境を意識的に変えていくということです。新たな環境をつくるということは、子どもの変化を予想することであり、自分の保育に仮説をもつということです。当然、その仮説が正しかったか否か、つまり環境設定が適切であったかどうかを見極めるためには、ていねいに子どもを見ることが求められます。砂山を先生たちだけでつくることを提案したのもこのような理由からです。

二つ目は方法論的なことですが、子どもたちの遊びの様子を写真やビデオに撮り、のちほどそれを観ながら保育者同士で話し合うということも効果的です。一場面ごとの子どもの動きや周辺の様子、保育者の関わりがどうであったかについて互いに話し合い、振り返りを行うなかで、自分が気づかなかった点や、今後注意して見ていくべき点などの発見につながっていくでしょう。

そしてもう一つ、もはや砂遊びを単なる「砂遊び」という一言では片付けないということです。私が紹介してきた砂遊びだけでも実に多様な遊びの側面がありました。たとえば、子どもたちは自らの身体を自覚し、動きをコントロールし、ことばを選び、想像的な役割を演じ、試行錯誤をくり返し、アーティスティックな表現を追求していたのです。このような多様な活動の要素を一言「砂遊び」ということばでくくってしまうならば、子どもの一つ一つの行為はきわめて漠然としたものとなり、保育者としての関わり方の焦点も大きくぼやけてしまうでしょう。

子どもが砂場にいればそれを「砂遊び」と称して終わりにするのではなく、子どもは砂場で何をしているのか、その具体的行動の一つ一つを分析的にとらえ、たとえばそれに「ごっこ遊びとしての砂遊び」あるいは「科学的な思考に関わる砂遊び」とでも命名していくならば、遊びの見え方はずいぶん変わっていくでしょう。もちろん子どもの遊びは一連の活動としてのつながりですから、全体的な流れをとらえることを忘れてはいけません。構造的な遊びのとらえ方もていねいなまなざしにつながっていくものと考えます。なお、このことに関しては、次にもう少し述べておきたいと思います。

③遊びの保育カリキュラムへの位置づけ

イギリスの保育施設を訪問したとき、保育カリキュラムの説明においてよく「ストラクチャー」ということばが示されました。これはまさに「構造」という意味ですが、「カリキュラム」ということばが一般には「何を、いつ頃、どんな順番で」といった時系列的な配列を意識することが多いのに対し、このストラクチャーは「何を、なぜ、どんなふうに」といった、遊びがもつ多様な内容の一つ一つと、それがもつ子どもにとっての意味への視点から保育計画を立てていくことの大切さが強調されていました。

たとえばある保育施設では、砂遊びを社会性、情緒、科学性、数学的思考、言語、身体といった五つの内容に分け、それぞれの内容における子どもの発達の可能性と具体的な活動の展開事例案が示され、保育者全員の共通理解となっていました（笠間、一九九一）。子どもの遊びの自由は保障しつつも、遊びへの専門的な関わり方が保育者の役割として示されていたのです。

しかし、これは何もイギリスの専売特許ではなく、日本でも課題とされてきたことです。保育内容における「五領域」はまさに、遊びという総合的な活動に見られる発達の構造的な視点を示したものでしょう。ただ問題なのは、そのことが具体的な一つ一つの遊びに対して、しっかりと意識され共通の認識

として保育カリキュラムのなかに位置づけられているかどうか、ということです。本来四月の砂遊びと八月の砂遊びと十二月の砂遊びとでは、その内容は大きく違うはずですが、ところがいずれも同じ「砂遊び」として、砂遊びができる日程だけが割り振りされたような保育計画では、「子どもたちの砂遊びにどのように関わってよいかわからない」という保育者の悩みが出るのも当然でしょう。

長年、保育現場で子どもの砂遊びを見てきた松本（二〇〇七）は次のように書いています。

「砂遊びは多様なかわりが可能です。それは砂遊びが、『砂』という対象を示したネーミングとなっているために、その中に様々な遊びを内包していることとも関係していると思います。」

多様で様々な姿をもつという砂遊び。その多様さと多面さの一つ一つを、実際に遊んでいる子どもたちの姿に見だし、ときにはその展開過程をじっくりと見守り、またときには自らも積極的に関わって変化させていくことができたなら、砂遊びの魅力はますます大きなものになっていくでしょう。

引用・参考文献

井桁容子 二〇〇五 「ていねいなまなざし」でみる乳幼児保育 フレーベル館

笠間浩幸 一九九一 保育における「自由」に関する一考察 北海道教育大学紀要 第四十二巻一号

笠間浩幸 二〇〇七 乳幼児期の砂遊び 発達 第百十号 六十五-六十六頁 ミネルヴァ書房

佐々木正人 二〇〇八 アフォーダンスの視点から乳幼児の育ちを考察 七十一頁 小学館

野村寿子 一九九九 遊びを育てる 協同医書出版社 十頁

松本信吾 二〇〇七 保育者の目からとらえた砂遊び 発達 第百十号 六十八頁 ミネルヴァ書房

かさま ひろゆき

1958年生まれ。同志社女子大学現代社会学部現代こども学科教授。『〈砂場〉と子ども』（東洋館出版社）『保育者論』（共編著、北大路書房）。